

音声言語医学研究施設の発展と年報の発刊を祝して

林 義 雄*

音声言語医学の研究は重要な項目であることは申すまでもないが、音声に就ては特別の関心をもっていること、言語に就ては忍耐と努力の必要な科目であって、従来なおざりにされていた。これが日本で音声言語医学の研究が進歩しなかった原因であろう。必要にせまられてか、最近各大学にも Speech clinic が設けられていることは同慶のいたりであるが、長続きさせたいものである。

切替さんは堀田先生の後継者であるばかりでなく、音声にも特別な愛情を持っていられる方であり、音響工学の専門家の藤村さんを迎えられたことは誠に敬服に値することである。多忙な切替さんを助けて沢島君がいる。このコンビは羨しい限りであり今後の発展を大いに期待する次第である。

久保猪之吉先生時代の耳鼻咽喉科のあの短かいドイツ語の Referat が遠くの国でもよく読まれていたことを痛感した私としては、年報の発刊にも賛意を表する次第です。これによって日本の音声言語医学の研究も海外に認められるようになるでしょう。

音声言語医学研究の将来に就て私の意見や希望を述べて見たい。

1. 音声

音声障害の治療ということは当然なことであるが、ナドレッチニーのいうように Kunst Gesang といふか、どうしたら正しい発声ができるかということ。正しい発声法を習うには外国で勉強しなければならないというような不合理なことをないようにしたいと思う。日本の音楽の教師が思い思いの指導をして(科学的の根拠もなしに)いることは日本音楽の将来にもかかわることだと思う。むずかしい仕事だと思うが、この方面にも進むべきだと思う。

2. 言語

言語障害の治療も困難な仕事ではあるが、訴えのない言語障害者がたくさんいる。美しい日本語を話すためには、どうしたらよいかフランスの例をひくまでもなく大切なことだと思う。話しかた教室というのは話術の教室であるが、それ以前の正しい日本語の教育や指導をどう進めるべきかを考えてもらいたい。

今の大学の教授はあれもこれもと忙しすぎる。片手間では進歩しない。好きこそ物の上手なれで、好きな人たちが集ってのこの施設はその点大いに心強い。しっかりやって下さい。

* 林診療所；慶応大学講師，耳鼻咽喉科学教室